

日時： 2020年10月23日（金） 18:30~20:00

講師： ジャスミン・ルカト氏 (Jasmin Rückert、デュッセルドルフ大学助教)

会場： ZOOM ウェビナー

第80回ジェンダーセッションでは、デュッセルドルフ大学助教でジェンダー研究・日本研究をご専門とされるジャスミン・ルカト (Jasmin Rückert) 氏をお招きし、ドイツとオーストリアの両国において、ジェンダー研究が一つの学問として導入されるに至った歴史的経緯と、今日の課題についてお話いただきました。

両国におけるジェンダー研究は、60~70年代の女性運動、学生運動の興隆に端を発します。当時の大学は男性中心的で、女子学生の割合は全学生の25%、女性教員の割合は全教員の2%と低いものでした。ルカト氏によれば、そうした環境下で彼女らが設立した女性学に関する自主的な研究グループが、後のジェンダー研究の礎となったといいます。これらのグループは、フランクフルト学派などの既存の批判理論や資本主義研究を継承しつつ、これまで付随的な問題として扱われてきたジェンダーと社会における不平等の再生産との関連性を問題化しました。その際、ナチズムへの女性の協力に対する反省や、旧東西ドイツそれぞれの体制の違いといった歴史的・社会的背景がジェンダー研究にも反映されているとの指摘は興味深いものでした。90年代に至ると、ジュディス・バトラーなどのアメリカの研究者やポストコロニアル理論、クィア理論の影響も受けながら、両国のジェンダー研究はより学際的な傾向を強め、大学内部にも教育課程が設置されるようになります。とはいえ、多様なジェンダー研究と政治的な運動をも含む旧来のフェミニズムとの接合/乖離や、保守層によるバックラッシュ、また大学進学率と階級の相関性など、未だ解決されていない課題は残っています。けれども、今日のジェンダー研究はインターセクショナルリティなどの新たな視点を取り入れながら、かつてドイツの高名な女性史研究者ジゼラ・ボックが唱えたように社会のラディカルな変革を試み続けているとルカト氏は述べられました。

質疑応答では、ジェンダー研究に対するキリスト教の影響や、今日問題となっている TERF (Trans-exclusionary radical feminist) に関してなど、日本や他の国々におけるジェンダー状況を比較考察するような多くの質問が寄せられ、終了時刻間際までそれらの質問にお答えいただきました。当初ルカト氏は、研究調査のために日本にいらっしゃる予定だったものの、新型コロナウイルスの影響により来日が難しくなり、本イベントの開催時期も未定となっていました。しかし、この度、オンラインでの開催の運びとなり、国境を越えた研究交流をはかることが可能になりました。充実したご講演をしてくださったルカト氏には、心よりお礼を申し上げます。

(立教大学ジェンダーフォーラム事務局 片岡佑介・横山美和)

立教大学ジェンダーフォーラム 第80回ジェンダーセッション

ドイツとオーストリアにおけるジェンダー研究

2020.10.23(Fri.) 18:30-20:00

Zoom によるオンライン開催

講師：ジャスミン・ルカト氏 (Jasmin Rückert)

デュッセルドルフ大学助教、ジェンダー研究・日本研究を専門とする。博士論文『ドイツとオーストリアにおけるジェンダー研究の歴史』で、1960年代後半から1970年代前半にかけてのドイツとオーストリアにおける女性学運動の歴史を研究し、その後のジェンダー研究の発展に貢献した。現在は、ドイツのフランクフルト学派の批判理論や資本主義研究を継承しつつ、ジェンダーと社会における不平等の再生産との関連性を問題化している。また、ナチズムへの女性の協力に対する反省や、旧東西ドイツそれぞれの体制の違いといった歴史的・社会的背景がジェンダー研究にも反映されているとの指摘は興味深いものでした。90年代に至ると、ジュディス・バトラーなどのアメリカの研究者やポストコロニアル理論、クィア理論の影響も受けながら、両国のジェンダー研究はより学際的な傾向を強め、大学内部にも教育課程が設置されるようになります。とはいえ、多様なジェンダー研究と政治的な運動をも含む旧来のフェミニズムとの接合/乖離や、保守層によるバックラッシュ、また大学進学率と階級の相関性など、未だ解決されていない課題は残っています。けれども、今日のジェンダー研究はインターセクショナルリティなどの新たな視点を取り入れながら、かつてドイツの高名な女性史研究者ジゼラ・ボックが唱えたように社会のラディカルな変革を試み続けているとルカト氏は述べられました。